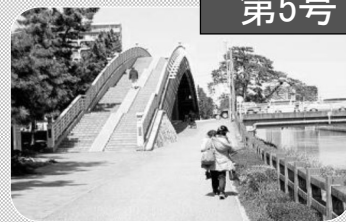


そうか歌人

第5号



草加市歌人会通信

もうそろそろコロナの話題にふれないことを書きたい、と書いたところすでに、コロナからまだ自由になりきれていないことの証左なのではありませんが、世の中は着実に脱コロナに向かって進みつつあるように感じられます。それにしても長かった（まだピリオドが打たれたような表現をしてはいけないか……）。

「そうか歌人」も、はや第五号の発行となりました。うれしいことに会員が着実に増えていて、そのためにこの会報のボリュームも今回は七ページとなりました。みなさん憶えていますか、創刊号は三ページだったことを。けっして七ページが当たり前ではないのです。活性を保ちつつ会を維持していかねば、またシュリンク傾向に一気に逆戻りということにもなりかねません。

歌会のこと、皆さん、お近くの方々にお声かけして頂いたり、この会報をコミセンなどに配布して頂いたり、さらに参加者、会員が増えるようにしていきますよ。

代表 斉藤光悦

会員の歌 (五十音順)

浮野の里で

新井美智子

かつて同じ職場の三人野うるしが広がる浮野の里の風中
野うるしの田の黄緑を守るよう大葦揺れおり浮野の里に
用水路に沿う野良道のホラここにも
すつくと立ちて白花たんぽぽ
江戸川の鉄橋渡るエクस्प्रेस筑波
に行こうと今日も誘いぬ
音大の出身テナーは大き口サブちゃん歌う「アイヤー アイヤー」と

寿命

石橋恵子

じんじんとほうれい線の消ゆる程
痛む差し歯の寿命を知りぬ
亡き人のブログそのまま「また明日」
さよならマークゆらゆら揺らぐ

桜貝ともに聞きたる潮騒の唐津の海
に想い出拾ふ

たふたふと水に漂ふ夢を見し氷枕の水に戻りぬ

煌々とダビインチの待つ手術室 闇の空白早十時間

伝言ゲーム

かしたにみかこ

陽の匂い嗅ぎつつ眠る夜具のなか北杜の祖母に頭撫でらる
初めての商談決めてえくば濃き娘は「ポーノ」とおでん頬ばる
田中さんと郵便屋さんの接触事故謝り合おうを二階より見ゆ
耳遠き母に話せり伝わらぬ伝言ゲームが続く市役所
売られればわれも（経年劣化）なりアマゾンに探す中古の本を

母を想う

勝木俊知

看護婦の母夜勤にて急ぎおり後追いをせし吾を振り切り
記憶無し母の味はと問われても幼き頃の貧しき食事

「母の日」にその生涯を顧みれば苦勞乗り越え負けず頑張り
百余歳永眠の母長寿なる遺伝子吾に伝えおりしか

「母の日」に亡き母に供うカーネーション昔のままに好きな赤色

令和5年 夏季歌会

●7月16日（日）13～17時

受付13時05分

歌会13時15分～16時50分

●アコスホール6階会議室

草加駅東口駅前徒歩1分

（草加市高砂2-7-1

ヨーカードの入っているビル）

（048-922-7005）

（参加費 500円）

歌会は、会報「そうか歌人」第5号（本号）に掲載された各人の作品（主に第1首目）を対象として進めます。「そうか歌人」を忘れずにお持ち下さい。

※必ず体温を測ってきて下さい。
※熱のある方、具合の悪い方は「遠慮下さい」。
※マスク着用にご協力下さい。



春季歌会の様子

あの日 あの時

小林とよみ

シユクシユクと夫研ぎくれし包丁の
切れ味思ひ吾も研いでみる
娘の夫より貰ひし焚かんの鉄玉子鉄
分不足を補ひにけり
娘らと座し冬の夕餼にはふはふと困
みし土鍋 一人の土鍋
前後タイヤ換へてはリンリンと支へ
くれたる三十五年
逝きし娘の残せし花瓶に百合活けて
穏やかやさしき笑顔思ほゆ

あさがお

小林美恵子

蒔かぬのに芽が出て蔓のび七月の風
にゆらゆら朝鮮あさがお
親指と人差指であさがおの細き蔓持
ち垣へ誘う
誘えどあさがお強い意志ありて今日
は垣には絡んでくれぬ
一夜過ぎ己の意志であさがおの蔓し
なやかに巻き付きおりぬ

今号のエッセイは「私の愛用品」「行
きつけの店」をテーマとしました。

七月の涼しき朝にあさがおは花咲か
せおり紫ふたつ

和菓子舗 ちぐさ 平林静代

これといった「愛用品」もなく、「行
きつけの店」と言ってもすぐに此処、と
頭に浮かぶ店もない。強いて言えば春日
部に在る和菓子舗「ちぐさ」だろうか。

「読売文化センター」短歌講座の講師
として春日部に通い始めたのが平成十六
年、以来二十年近くにもなる。西口駅前
の藤通りに面した角に老舗の和菓子舗
「ちぐさ」がある。教室の行き帰りに店
の前を通ると小豆の煮える仄かな香りが
漂い、匂いにつられてついつい暖簾をく
ぐつてしまう。広い店内には色とりどり
の美しい和菓子が並び、見ているだけで
も楽しくなる。このお店の名物は羽子板
最中。羽子板を形どった最中には甘味を
押さえた漉し餡の中に丸ごとの栗がごろ
りと入っていて美味。一つ一つの包装も
美しいので年末の贈り物は羽子板最中と
決めている。正月用にと喜ばれている。
また季節行事の折々に売り出される和菓
子も楽しみの一つ。蓬餅、うぐいす餅、
桜餅、柏餅など。
月二回の短歌講座の帰り道、風にはた
めく「ちぐさ」の暖簾を潜り、「今日は
何にしようかしら」と店内を廻る。あれ
これ買い込み豊かな気持ちになって帰路
に着く。

今、行きつけの店はスーパーであ
る。自宅から自転車で数分の距離内
に五店のスーパーとホームセンター、
コンビニがある。特にコンビニは料
金の支払いなども取り扱っており誠
に便利である。悪天候の日を除き、
ほぼ毎日、スーパーでの買い物に妻
のお供をしている。前日または当日
の新聞の折り込み広告で品物の値段
を確認し、一番安い店に買いに行く。
同じ品物が店によっては百円近くも
差がある。諸物価高騰の折、安価な
もので間に合わせるのは生活の知恵



スーパーとヘルメット 勝木俊知

である。野菜（玉葱、ジャガイモ、
南瓜、キャベツ）や牛乳（1パック
1^ポ）、お米（5^ポ）、ビールなど
はかなりの重量になる。この重量物
を自転車にて運搬するのが私の役目
である。最近、自転車に乗る時には
ヘルメットを着用することが努力義
務とされた。近くの自転車店には子
供用か、いかにもヘルメットの観の
品物しか見当たらず、困っていた時
娘がキャップ型のをプレゼント
してくれた。買い物時の愛用品とな
りそうだ。



七十七歳で急逝した母は、幾つか
眼鏡を持っていた。すべてお洒落用
で度が入っていないかった。それに比
べて私は何年か前から乱視、老眼、
白内障が進み、三日月は火の鳥のよ
うに何重にも輝いて見える。本を読
むにもパソコンを打つにも眼鏡は欠
かせない。

母の眼鏡 浜口美知子

新しく眼鏡を作ることとなり、ブ
ルーの縁取りで少し大きめの眼鏡を
眼科に持参した。「母の形見なんど
すが使えますでしょうか」というと
「素敵なおフレームですね」と、女医

さんから言われた。現在私が持って
いるうちの一つがそれで、レンズを
入れ替え文字用として大事に使って
いる。ただ、ガラスのレンズ用で、
今時の軽いレンズは入らず、少々重
いのが難点ではある。パソコンに向
かい歌や文章を書く時、母に語りか
けている自分がある。母をより身近
に感じる眼鏡でもある。
生前、実質的な眼鏡は必要なかつ
た母と、今も健在でこの四月には一
〇一歳を迎えた義母も、眼鏡いらず
で手紙を読んでいる。

名曲喫茶

瀬田寿男

今の私には行きつけの店というのは無い。

食べたい物がある時にその店に行き、必要なものがある時には専門店に行く。今となつては必要なもの、腹が減つた時に行くコンビニ位が行きつけとなるのだろうか。故に若かりし頃の行きつけの店のことを書いてみようと思う。

私の学生時代好きなことの一つに喫茶店で珈琲を飲みながら音楽を聴くことがあった。時代を反映し当時流行ったダンス音楽、タンゴ、ルンバなど軽音楽と称される部類だ。多くの喫茶店はこの音楽を流していた。私も好きだった。でも本命は別だ。行きつけの店の名は駿河台の「らんぶる」、上野の「ローマ」、お茶の水の「田園」等、名曲喫茶と言われている店だ。学校帰り、授業の合間、許す時間のある時には出掛けて行き聴き入っていた。卒業後にも記述の三店には続けて聞きに行っていた。社会人になってあまり行けなくなったが……。

数年後には三店とも閉店していた。今では時々本郷にある「カデンツァ」という店に聴きに行く。



死ぬな兄ちゃん

斉藤光悦

なげいてもいきどおつてもいのつても兄を離れざる病魔こんちくしょう灰色のコンタクトレンズしたような目をしていたと声震う義姉幼き日二段ベッドの上で寝ねし兄はいまICUベッドにひと月思ひ出をおもいだすにはまだ早い死ぬな兄ちゃん母ちゃん泣かすなわが歌が岩手の空へ飛んでゆき兄にふりかかることあらなくに

変貌

佐川慶子

通る度「ちわー」とと源さん声掛けし市六水産道路となりぬ同級生の小林米店消えている九人家族の米購いし体操着セーラー服を求めたる梅原商店マンションが建つややきつい坂の途中の蕎麦店や寿司屋の暖簾いづこに下がる様々な人生背負う人ら住む代々木八幡実家への道

「行きつけの店」など、酒を飲めない私にはあるはずもない。そう思いながら考えていたら、若い頃そう言える場所があったことを思い出した。

まだ会社に入つて三年目、東京本社から福岡の支社勤務となり、七年ぶりに故郷での悪友達との交友が叶つた嬉しい場面でもあった。小学生も帰郷早々からその友人達の輪の中に繰り込まれ、毎日の乗降のバスターミナルの傍にある「木馬」に入り浸ることとなった。当時はみんな独身で、仕事は様々だったが、街のほぼ真ん中にあるその店は集まりやすく、適当にオシャレで味もまずまずの人気店、またウエイトレスの女性も可愛い娘が多い店だった。時代はまさ

中学生の時、夏休みの宿題に「自由課題」という項目があった。自由という事は、やつてもやらなくてもどちらでもいいという事だろうと思つて、のんびりしていた。縁側に寝そべってパラパラと国語辞典をめくっている時、「この辞典を一冊丸ごと読んでみるのはどうだろうか」と思つてしまった。最初のページにはなんと「この辞典を利用される方へ」と、文学博士の石井先生のごあいさつまで載っているではないか。

「あ」から読み進める内に、その

国語辞典

田代とき江

内容の豊富さに引き込まれてしまった。「そうだ。この事を自由課題として提出しよう」と思いついた。いつもはさえない私だったが初めて先生にほめられたのだ。スマホで瞬時に検索できる今でも、私は紙をめくって言葉を探す、この面倒な作業が好きだ。うす汚れて黄ばんだこの辞典を、お棺の中にメガネといっしょに入れてほしいと思つている。



「木馬」

中村武彦

に懐かしの『平凡パンチ』真つ盛りで、閉店までいて読みあさつたりしていた。毎日誰が来て誰が来ないか決まつてるわけでもなく、その日の具合で麻雀屋に行つたり、店の娘を連れて（連れられて？）ボウリングへ流れたり、他に用事があつても、家には寄らなくて「木馬」に顔を出してから用事に向かう、そんな毎日であつた。一度その日いた七人のメンバーでボウリングに行き、余つた三千万で佐賀競馬場へ乗り込み、三十万の万馬券の大当たり！「佐賀の奥座敷」嬉野温泉へ全員タクシーで乗り付け芸者遊びのどんちゃん騒ぎ、翌日七人で帰還したのもその「木馬」の想い出である。

駅ピアノ

瀬田寿男

歩く人流れるリズムに足を止めじつと聴き入る懐かしの曲
駅ピアノ親子連弾和やかに通行人も聴き入り拍手
巧みに弾むネイルの指に聴き入る人とかわすほほえみ
ピアノ見てそっと近寄るサラリーマン見事に弾いたラ・カンパネラ
駅ピアノ楽しみ奪う行為有りマナー違反でピアノを撤去

手袋

田代とき江

ここで泣くわけにはいかない 渡された手袋放つて山道下る

「また来ちゃいました」
「どうぞ、どうぞ。お待ちしました。」
何かにつけて立ち寄りさせて頂いた店。婦人洋品の「紺屋店」さん。
いつ行っても「どうぞ、どうぞ。」と快く迎えてくれ、気さくにサツとお茶を出して下さる奥さんでした。
いつも二人、三人がいて、多い時には五人六人という時も。お店の一角にテーブルとソファがあり、私たち超高齢者の溜り場、いえオアシスでした。

紺屋店さん 吉村八千代

残念ながら今年一月末日で閉店となつてしまいました。ご主人が高齢で仕入れが大変になったとの事でしたが、実際に閉店されて三ヶ月半余り、淋しい限りです。
集っていた皆さんが様に言われることは本当に貴重な場所であり時であつたということ。
「紺屋店」さん、長い間本当に本当にありがとうございました。



幾冊も通帳残して父が逝く キヤバクラパチンコ経験もせず
烈風に飛ばされながら畔を行く こんなに切ない郷里であつたか
枯渇したホルモンのせいと医師は言う 第一関節指の変形
根元の土搔き分けゆけば紫の巾着に似た葉ランの花あり

小学六年生

戸井田聖子

幾冊も通帳残して父が逝く キヤバクラパチンコ経験もせず
烈風に飛ばされながら畔を行く こんなに切ない郷里であつたか
枯渇したホルモンのせいと医師は言う 第一関節指の変形
根元の土搔き分けゆけば紫の巾着に似た葉ランの花あり

竹藪の斜面に足を踏ん張って息子は一産土の関根新屋の白藤をスマホに写す息子を写す

二十七歳の時、東京の実家を出て、草加の住人になった。独り暮らしが楽しくて、夜はほとんど外食だった。居酒屋やスナックなど、いろいろな店に出かけた。しかし、そのころ通っていた店は、現在一軒も残っていない。
現在は獨協大学前駅近くの「つるみ」と、新田駅近くの「阿波路」くらいである。この二軒では、仲間たちと月一で定例の飲み会を持っている。「つるみ」では、羽生の「花陽浴」などの珍しい日本酒を飲むことができる。三種の飲み比べセットを飲み、気に入った酒を一台で頼

日本酒の旨い店 宮本 清

妻が焼肉を食べたいという時は、新田の「旭苑」に出かける。ここには飛騨高山の「鬼ころし」という日本酒がある。これもまた旨い。
わたしの行きつけは日本酒で決まるといえそう。



浅草橋駅前の江戸通りを渡り、両国方面へ三〇四分行った所（柳橋）に、池田弥三郎が愛した店「洋食大吉」がある。銀座の夫婦羅屋「天金」の息子で、国文学者の池田弥三郎が愛した店だから、さぞかし趣向を凝らした店かと言うと、さにあらず、大吉の名のごとく庶民的なのだ。ビニール製の赤いギンガムチェックのテーブルクロス、壁には酒やおすめ料理の手書きポップが貼つてあるし、食器類もこだわりのない普通のものである。
メニューは豚カツ、ハンバーグス

洋食屋「大吉」 小林美恵子

テーキ等懐かしい味、解りやすい美味しさなのだ。時季ともなれば鰹のたたき、貝のオイル煮、牛すじの煮込みなどを出す。酒飲みにはたまらない。そして値段はリーズナブル。だから平日の夜はサラリーマンでいっぱいになる。
コロナ前、テレビで紹介された。「やられた」と思った。行列ができるようになるからだ。
しばらく行っていないが、そろそろ予約をと思っている。行列ができていなければいいが。

散歩

富澤さき子

声あぐるごとくに揺れる白木蓮 駅前広
場昼さがりなり
「アカシアの雨にうたれて……」口ずさ
み玄関に飾るミモザ二輪を
かたくりの反り返るすがた艶やかに吾も
真似てみる 春の朝へ
オキザリス寒さに耐えし赤き花母似と言
えり娘は口ぐせに
チューリップの生まれはトルコと人の言
う瓦礫の中に子等の目虚ろ

二月

中村武彦

そちらには行かぬと小犬が吠えている
「帰り道」だと怒る嬸に

「三条へ行かなくちゃ

三条堺町のイノダっという

コーヒー屋へね……」

フオーク歌手の高田渡がギター一
本で歌う「コーヒーブルース」。こ
の歌を知って「イノダ」へ行ってみ
たくなった。もうかれこれ五十年前
のことだ。イノダは京都三条堺町通
りに本店がある。入口には多分看板
なのだろう、大きな鉄製のコーヒー
ミルが飾られていた。
肝心の「イノダコーヒー」はかな
り濃い焙煎。だから初めて注文した

京都 イノダコーヒー 新井美智子

時、既にミルクが入っていたのには
驚いた。ミルクが入ってちょうどよ
い苦さ。しかし香りは極上。それか
らは京都へ旅する度にイノダを訪れ
る。
拡張を図るイノダは東京のデパー
トにも支店を出している。しかし店
に入る気はしない。やはり京都を訪
れて革張りのふわっとした椅子に座
り、高田渡の飄々と歌う姿を思い出
しながら、香り深い「アラビアの真
珠」を味わうのが至福の一時なのだ。
*店名は「イノダコーヒ」と記す

二月には明るい陽ざしの裏道を嬸の小犬
と抜きつ抜かれつ
正月はついこの前でもう二月電話もなら
ず人も来ぬ午後
「ガンじゃない」「ガンかもしれぬ」が
交錯し電車は着きぬ 友の待つ駅
「愛する為愛される為人は世に」寂聴の
声まだかけ廻る

紫の風

並木文子

蔓のばし鉄線の花連なりてフェンスの一
処紫の風
足裏を引きずりながら歩く癖きのこの私
引きずっており
つばめの巣ご注意くださいとなり家の主
さしおき軒端見守る

愛用品、なにかな。思いつかず、
何日か考えた。その何日かの間、毎
日使うものがあつた。ファーバーカ
ステルのグリッププラスというシャー
ペンである。

芯の太さ0・七ミリ、固さBを愛
用している。一般的なシャーペンよ
り少し鉛筆に近い感じ。程よい太さ
の三角グリップが指に馴染む。少し
重い、却って安定し疲れにくい。
息子にも一本プレゼントした。

このシャーペンで、ロールパンの
手帳に毎日メモを書き込んでいる。
シャーペン本体と手帳のバンドが、

夫婦にて営む八百屋年々に閉まる時刻の
早まりてくる
月明かりの小一時間のウォーキング友の
病にその後途絶えり

シャープペンシル 戸井田聖子

共にネイビーで、持っていてしつく
りくる。メモ取りは苦手だが、今の
ところ半年ほど続いている。最強の
組み合わせだ。
ご承知の通り、シャープペンシル
は和製英語。米語ではメカニカルペ
ンシル、英語ではプロペリングペン
シルまたはオートマティックペン
シルという。プロペリングは押し上げ
ることを表し、確かにノックすると
芯が押し上げられてくる。下向きだ
から押し下げられる、のほうがりっ
くりくるかな。

喜寿を迎える年になるが、未だ「行
きつけの店」なるものに縁遠い私であ
る。近所のスーパー、コンビニ、理髪
店に定期的に行くが、まったくの物理
的交換の過程における繋がりで、
そこに人間的な接触はない。見方を変
えれば常に初対面であり新鮮なのだ
……。
そんな私であるが、なじみの蕎麦屋
と友とのやりとりを聞いて考え方をあ
らためた。友は長ネギが大嫌い、そ
の店では言わなくてもネギ抜き蕎麦

「いきつけ」は縁遠いが… 野崎芳樹

が出る。ところが鴨南蛮蕎麦を頼んだ
時だけは決まってネギが入ってくるそ
うだ。ネギのない鴨南蛮蕎麦はありえ
ない、これは店のこだわりなのだ。し
かたなく友はしつかりネギを残して店
を出る。
このやり取りを聞いて、こうした頑
固者どうしの人間的やりとり、頑固者
はともかく、こんなやりとりのできる
「なじみの店」があれば、外での飲食
もまた楽しいものになるに違いない、
と思うようになったのである。



昭和が消えた

野崎芳樹

出場者の英文字多き紅白にひとりつぶやく「昭和が消えた」
日本語なしレイクタウンに並ぶ店
あったよ日本語「左側通行」
久々の友と別れてただおぼろ「赤色
エレジー」にひとり聞きいる
煙たつ異様な空間駅のそば 皆おし
だまり三分で外へ
嘲弄し足蹴にしているが忘れるな憲法
九条あればこそこの今を

WBC決勝戦

浜口美知子

毘沙門天憑依したるか翔平の眼光す
るどくマウンドに立つ
憧れは捨つべし越えねば勝てぬぞと
円陣まなか翔平の檄

かれこれ半世紀になるだろうか。引越の度に傷を作りながら私と共に懸命に生きてきた「箆笥」がある。
中身はと言えば母が夜なべして縫ってくれた「喪服」と「留袖」。どちらも必ず使う日が来るからと「嫁入り道具」として持たせてくれた。正直言つて狭い部屋には「箆笥」は無用の長物の感があった。「喪服」は亡父母を見送り、「留袖」は次女の結婚式に「しっかりした物ですね。昔の物は良いです

箆笥

富澤さき子

ね」との係の人の世辞に気を良くし、亡母の想いもいっしょにまとった。
近頃は少し金具がぐらついてきたので早々工務店の方に修理をしていただき使用中である。
衣替えの時が近づくとき引き出しに新聞を敷き、樟脳を入れる作業は年二回必ず行っている。
いつも母の厳しい目が私を見守ってくれている気がしてならない。「箆笥」と共に。

球場にひびく雄叫び限界のさきを投打の四肢の撓れる
九回裏フルカウントに翔平の闘魂一球世界を制す
帽子飛ばしてマウンドに仁王立ち世紀の決戦歓喜この眼に

葱坊主

平林静代

母の手をほだきて走る幼子は菜の花畑に沈んで消えた
菜の花のむかうのむかう遠き日の母あてわかれははらからの居て
帰り来ても父母亡くて夕畑に葱の坊主がつくねんと立つ
総苞に覆はれて立つ葱坊主夕風立てば歩み出ださむ
日暮れてもさみどりの空いちりんと呼ぶべく星が瞬きてある

思い込みの激しさに我ながら閉口する。
愛用品イコール万年筆という印象が強い。どちらかというと殿方のイメージが強い。それも執筆業の殿方。夏目漱石・三島由紀夫・池波正太郎・井上ひさし等々きりがない。女性では向田邦子。悪筆でも有名だが、彼女は万年筆愛用者からの略奪魔だったらしい。

気持ち良く解る。使い始めの空々しい事と言ったら。馴染むまでにどれほどの時間を費やすことか。購入時は銘柄・フォルム・材質や色に拘り、毎回今度こそと秘めた闘志を燃やす。しかし、思う

パーカーの万年筆

石橋恵子

ようにならないのが万年筆である。決して媚びてはくれないのである。主従関係ではないのだから致し方ないのではあるが、手元に眠り続ける四本の万年筆を見ると、歯痒さを越え歯ぎしりしたくなる。
現在愛用しているのは、一番安いパーカーのしなやかなフォルムのブルーボディ。八年目に入る。万年筆は走り書きの時こそ力を発揮する。たとえそれが縦書き日本語でも。



初夏

古川シズ子

初夏と思えぬ程の暑さなり早くもクーラーの必需品となる
幼子の和毛をなでて初夏の風通りゆく部屋の明るし
春の空三日ともたがず今日の雨降りみ降らずみ土においたつ
木洩れ日が桜若葉を透りゆく光の子等が踊りいるよう
手入れすませ干した冬布団ふつくらと日向のにおい初夏の陽の

日本のゆくえ

宮本 清

地球には飢えに苦しむ人あるに、武器にこれほど金使うとは
必勝しやもじ贈りし人あり。賢治なら、「つまらないからやめろ」と言うよ
ウクライナに支援続ける国々よ。武器を給することよいか
ウクライナに戦火は止まず。着々と日本は戦争準備が進む
戦争ならぬ政治を成すべきを。危うい国となりゆく、日本

君去りゆくが如く

柳 重雄

手のひらの桜花びら風にのり君去りゆく
が如くに消えゆく

水仙の黄ミモザの黄から菜の花の畑に広
がる黄色の春だ

天才で夭折の画家の自画像と視線を合わ
す何思う視線

ガラス越しの会話はしばし途絶えたり接
見室の狭き空間

悲しみを瓦礫とともに積み上げしウクラ
イナ侵攻いつまで続く

花に寄せて

矢作幸子

満開のミモザの花を愛でながら語らう兄
に老いの影見ゆ

近所で飲むときは、草加駅か谷
塚駅近くの居酒屋。草加駅周りで
は「猿楽」「一誠」という和食ダ
イニングを家族呑みのときは攻め
る。でも、ちと高い。一人で飲む
ときはもつばら、草加駅近の「鳥
秀」だ。沿線に兄弟店がたくさん
ある東武線沿線の名店。たぶん本
店というか発祥店は松原団地駅
（いまは獨協大前駅）近くにあっ
た。鳥も豚も串焼きがおいしい。
もちろん豚モツの煮込みも。
それから鴨焼きがとてつもなく

モツ焼き「鳥秀」

齊藤光悦

おいしい谷塚の蕎麦屋「ふか川」。
なんだから知らないがいつも親父
がパートのおばさんを怒鳴りつけ
ているのが気になるが、鴨焼きの
肉質はすばらしい。怒鳴りつけて
いるせいだろう、いつも店先には
「パート募集」の張り紙が。委細
相談と書いてあるけれど、もし
「怒鳴らないなら手伝
います」なんて言われ
たらどうするんだろう？
すこしはおとなしく
なるかな。



にわか雨頬をかすめて散る桜胸をよぎる
は難病の友
半月の留守の間にチューリップムスカリ
咲いてねざらいくれる
タンポポに水仙ミモザ菜の花と春の花色
まといてみたし
六甲の山に咲く藤嬬やかに藤子とう名の
義母を偲べり

「なんじゃもんじゃ」の木

吉村八千代

意志を持つ生き物のごとく春嵐うなりを
上げて眠りを破る
葉が見えぬ程に盛りの大躑躅その色表わ
すことばを探す
沈丁花の花の後から芽が増えて来季思え
ば心浮き立つ

久喜の里「なんじゃもんじゃ」とう大木
は青空に映え白くかがやく
黒雲がみるみる広がり雷鳴の数分後の大
粒の雨

季節

和田賛三

ツツピーと四十雀鳴く九段坂緑したたり
夏来たるらし
彼方此方からウグイスの声聞こえ来る印
旛沼へのタンポポの道
曇天に今年の桜白さ増し兄の健忘頭れに
けり
認知症は兄の頭を食いたるか夜の十一時
を朝と言ひ張る。
散歩しつつ兄の行く末を思いおればブラ
ジャーひとつ道に落ちており



事務局からお知らせ

「そうか歌人」第5号を無事発行することができました。会員の
皆様には快く送稿していただき感謝致します。
今号の編集・校正・発送は、齊藤光悦・宮本清・新井美智子・
田代とき江・佐川慶子・平林静代・かしたにみかこが担当致しま
した。



(かしたにみかこ)

「そうか歌人」第6号原稿募集

「そうか歌人」第6号の発行を10月
1日に予定しています。短歌、エッ
セイの作品を募集します。

原稿要領

- ・短歌5首（自由題、原則新作、別
途10文字以内のタイトル）
- ・エッセイ「作歌上のこだわり」、
または「忘れ得ぬ人」（どちらか
をお選び下さい）（20字×20行、
別途10文字以内のタイトル）
- ・締め切り： 8月19日（土）消印
- ・発行（予定）： 10月1日
- ・送付先
①〒340-0045草加市小山
2-2-1-12 新井美智子宛
- ②メール (sokakajinkai@gmail.
com)